

オスマン帝国からオスマンⅡトルコ帝国へ

青年トルコの革命からの考察

横浜市立戸塚高等学校 智野豊彦

一、はじめに

私達がかつて、オスマンⅡトルコと聞きなれた国の支配民族はムスリムであってもトルコ人ではなく、トルコ帝国と呼ぶべきものではなかった。このため教科書も近年では「オスマン帝国」と記載するようになった。しかし多民族国家「オスマン帝国」において支配民族が自らのナシヨナリズムを鼓吹する自縄自縛の下、第一次大戦に突入し、トルコ人によるネイションステイツであるトルコ共和国が形成されていく。いかにしてトルコ帝国と呼ばれるように変質していったのか、またトルコ人とは何であるのかを「青年トルコ」の活動を中心に考えてみたい。

注 本校で使用している『世界の歴史』81山川世B576では「オスマン帝国」という表記が大半を占めながら、3B政策の記述部（p262）では「トルコ政府」と表記されている。

二、トルコ人とオスマン人

すでにセルジュク朝においてもベルシア・アラブによる文化変容によって、民族意識はアマルガム的な文化認識であった。さらにキリスト教徒子弟徴用によって高級官僚層を創出させる「デヴシルメ」によって支配エリートになった者たちは自らのアイデンティティを「トルコ人」と意識する余地はなく、オスマンに属するものとして「オスマンル（オスマン人）」という表現が用いられた。「トル

コ人」とは無知なアナトリアの農民ないし「土百姓」「土民」という侮蔑的表現であった。例えば一七世紀のコチュェⅡベイの『トルコ語年代記』でイエニチエリの不満のなかでトルコ人という語が出てくる。

「トルコ人、ジブシー…、駱駝乗り、荷運び人夫、追剥ぎする者」またハレトⅡエフェンディーはパリに赴任した一八〇二年にフランス人に「トルコ人の大使」と呼ばれてショックを受けている。

さてフランス革命によって欧州中にひろがった「パトリオティズム」と「ナシヨナリズム」の嵐にオスマン帝国も無関係ではいられなかった。ナポレオンのエジプト遠征をきっかけに成立したムハンマドⅡアリー王朝は自立性を強め、またアラブ民族が帝国から分離する先駆けとして、ワッハーブ派は聖地を占領しオスマン朝スルタンを異端者として挑戦状を突き付けた。またバルカン半島でもギリシアの独立をはじめミットレ制は少数民族のモザイクに分解していった。当初は新しい忠誠心と帰属意識を作り出していくパトリオティズムは支配エリートからも歓迎されたが、非ムスリムの賛同は得られず、「瀕死の病人」として列強によって浸食されていった。

「西洋の衝撃」に対してオスマン帝国側でも主体的に近代化・西洋化の取り組みがなされた。「ニザーミ・ジェディード」を進めようとしたセリム三世はイエニチエリ軍団の反対によって死に追いやられたが、一八二六年彼の意思を継いだマフムト二世が激しい市街戦によってイエニチエリ軍団を虐殺し軍事改革を行った。また続く一八三九年アブデュルメジト一世のギュルハネ勅令によって始まるタンジマートによって国政の近代化が進められていく。しかし莫大な国庫金を投入しても、その果実は欧米人と国内のユダヤ人やアル

メニア人などの業者だけが受け取り、その反面ムスリムがブルジョワに成長する道は塞がれていた。帝国やスルタンに対する不満は、買弁商人として利益を博する非ムスリムへの民族問題にすり替えられ、クレタのギリシア人への圧迫、アルメニア人の抑圧・虐殺が引き起こされていった。

三、青年トルコ人

一八七六年アブデュルハミト二世が即位し、ミドハト憲法が制定されるが、翌年の露土戦争によって憲法は停止され、イステブタート（専制）が復活する。スルタンは危機打開のため上から厳密に統制した汎イスラーム主義を政策として採用し、このためスルタン＝カリフ制の伝説を強調していく。

このイステブタートを打破していくために、一八八九年軍医学生イブラヒム・テモによって「統一と進歩委員会」がつくられるが、彼はトルコ人ではなくアルバニア系ムスリムである。パリで開かれた青年トルコ人会議で議長をしたサバヒッティン公は民族の主体性を認めた地方分権を主張していた。かつていわれていたような「青年トルコ党」という団体が存在したわけではなく、離合集散した運動・結社の総称が青年トルコである。このため近年では教科書の記載も青年トルコ人となっている。にもかかわらず青年トルコ人と「統一と進歩委員会」を同一視し、その政策がトルコ人至上主義と受け止められるような記述は問題ではないだろうか。

注 『世界の歴史』81山川世B576（p258）

日露戦争で立憲制日本が専制国家ロシアを打ち破ったことに影響を受け、オスマン帝国の軍人はミドハト憲法と門閥打破によって日本のような国家改造を断行できると信じるようになった。イブラヒ

ム・テモは逮捕され「統一と進歩委員会」は一八九七年には壊滅状態となったが、サロニカでつくれ現役軍人に根をはった秘密結社「自由」が「統一と進歩委員会」に改名する。この結社が一九〇八年に革命を起こすが、このときには少数民族も権利拡大を規定した憲法の復活を歓迎し、反政府ゲリラも一時停止するのである。

四、新たな専制と汎トルコ主義

革命のニュースは諸外国に衝撃を与えた。特にボスニアとブルガリアは名目上はオスマン帝国領であり、議員選出を求められると統治権に問題が生じることから、前者はオーストリアに併合され、後者は完全に独立した。革命の影響はまず領土喪失として現れたのである。またヴェールを外した女性に腹をたてるムスリム純粋主義者や保守派によって一九〇九年イスタンブール暴動が起こされる。打ち続く内外の危機に革命の中心であった「統一と進歩委員会」は鎮圧と排除で臨んだのである。イスラーム主義や地方分権主義は次第に否定されトルコ民族主義が主流になっていく。折しもロシアで権利拡大を目指して戦って挫折したトルコ系革命家達が、青年トルコの革命に理想を求め亡命してきたのである。これによって汎トルコ主義は肥大化し、オスマン帝国に止まらず、ロシアそして中国にいたるユーラシア一帯にまでその民族の概念を膨らませていくのである。この過程でトルコ中心主義を嫌う諸民族主義が帝国各地に台頭してくるのである。その代表が言語・文化的な復興に過ぎない民族主義であったアラブとの関係に終止符をうったことであろう。

一九一三年のバーク・アリー（大宰相府）襲撃事件とバルカン戦争での活躍によって、「統一と進歩委員会」内相タラト・陸相エソヴル・海相ジェマルによる三頭政治が始まる。翌年、親独のエ

ンヴェルと協商側の判断ミスにより帝国は同盟側になつて第一次大戦に参戦する。これによつて汎トルコ主義は政治的により重要性を高め、ロシア領のトルコ系諸民族に対して工作のため度々使節が送られ、大トルコ民族国家構想が頭をもたげてくるのである。

五、祖国防衛戦争

第一次大戦の敗北によつて汎トルコ主義は力を失つていく。亡命したエンヴェルが中央アジアに独立国トルキスタンをつくる夢を追い、ソビエト政権と争い、殺されたことは象徴的ではないだろうか。新たなトルコ民族の概念が「統一と進歩委員会」認識番号322号ムスタファアハケマルらの活動によつて作られていく。

一九一九年、汎ギリシア主義のヴェニゼロスを首相とするギリシアが西部から進駐し、東部ではザカフカスに誕生したアルメニアが虐殺・圧迫された歴史をもつ同胞を併合し大アルメニア国家を建設しようとしていた。バルカンとアラブが失われた後、アナトリアだけは新しい国家のために必要なものであった。にも関わらず東西からのアナトリアの危機に帝国は無力であり、抵抗する力はイスラーム主義者から、民族主義者、社会主義者、共産主義者にいたるまで様々であり、明確な方針と組織に欠けていた。この抵抗力をアナトリア・ルメリ権利擁護団としてまとめあげたのがケマルである。

東部戦線ではキヤーズム・カラベキル将軍が勝利を収め、一九二〇年ギョウリュ条約にてロシアとアルメニアを二分する。西部ではイスメト・イノニユの活躍によつて一九二二年にギリシアを駆逐した。この祖国防衛戦争ではアナトリアの防衛で手一杯であり、かつてのような汎トルコ主義は意味をなさず、アナトリアという大地に根をはった民族主義が作り出されていくのである。

六、トルコ民族

ケマルはトルコ人からなる国民国家建設を目指していたが、先述したようにアナトリア防衛の危機にあつたつて抵抗する人々の立場は様々であつた。

「アルメニア人、ギリシア人のオスマン帝国及びムスリムの権利に対する攻撃には断固として抵抗する。」…エルズルム会議の宣言

このように一九一九年時ではまずムスリムとして団結させた。またアナトリア・ルメリー権利擁護団結成では、ナクシユバンデー教団をはじめイスラーム指導者が多大な力を發揮した。このためナクシユバンデー教団のシェイフ・ハジユル・フエズ・エフェンディがエルズルム会議・シバス会議の常任委員の一人となり、一九二〇年のアンカラ大国民会議でも三〇人の宗教指導者が選出されている。

この会議において厚生大臣がトルコ民族性の維持のために健康と公共衛生の整備充実を訴えたとき、チエルケス出身の議員が憤慨した。

「トルコに住む、チエルケス人、チエチエン人、クルド人はどうなるのか。」

これに対し、世俗民族国家建設を目指すケマルは次のように言うことしかできなかったのである。

「トルコ人について語らないことにしよう。ムスリムについて語るう。」

この国民会議でもトルコ人という概念は既に存在するものではなく、将来に向けて獲得するものであつたのである。

トルコ人国民国家建設に際して、複雑な宗教と民族のモザイクを

解消しなければならなかった。アルメニア人は離散民族となり、クルド人は単に「山岳トルコ人」とされた。一九二三年ローザンヌ条約調印後「トルコのギリシア人」と「ギリシアのトルコ人」が強制住民交換されるが、ギリシアから送還されたトルコ人はギリシア語を母語とするムスリムであり、トルコ語を母語とするカラマンリと呼ばれたギリシア正教徒はギリシア人として駆逐された。ムスリムはギリシア人からトルコ人を創出する作業の方が、キリスト教徒トルコ人をトルコ人に改造するより簡単だと確信したのである。世俗主義者ケマル大統領にとつても、新しいトルコ国民国家の発展にあたって宗教的アイデンティティの確認から出発せざるを得なかったのである。

一九二二年のローザンヌ会議では、ケマルの指示に従ってイスラームト・イノニユは、英・仏・伊に対して、外国からの干渉もなく、外国への侵略の意図もない、民族としてのトルコ人国家の樹立を願っていることを確信させねばならなかった。

メフメット六世は退位し、スルタン制は廃止されたが、政教分離主義者のケマルもムスリムの支持を得る為に、伝説であったカリフの座は尊重せざるをえなかった。大国民会議は、逃亡した最後のスルタンにかわって従兄のアブデュルメジト二世をカリフに選出した。バグダードやイラクのようなかつての帝国地方州の全てで、カリフ・アブデュルメジト二世の名が毎回の金曜礼拝で崇められた。のみならず諸外国のムスリムは帝国主義列強の植民地支配下において、自治と独立を求めるシンボルとなることを期待されてしまう。特にインドではムスリム連盟とインド・ウラマ協会が対立を克服するためヒラーファト宣言が出される。一九二四年ケマル大統領は

外国勢力が国内問題に介入する機会を廃することを名目に、カリフ制をも廃し、トルコ共和国はオスマン帝国から決別した。

七、おわりに

EU加盟問題は、テロと抑圧を繰り返しているクルド人問題だけでなく、オスマン帝国時代のアルメニア虐殺をもクローズアップさせている。なおかつソ連崩壊後、かつての帝国に沿うようにイスラームを要に地中海・エーゲ海・黒海に広域経済圏が形成されてきており、従来のヨーロッパと欧州とアジアという区分を再考する材料を与えてくれる。

また肉体的形質が多様であり且つユーラシア一帯に拡散居住するトルコ語族と、時代と社会状況によって変化するトルコ民族は、国家・民族というリヴァイアサンを考える助けとなるものである。

〈参考文献〉

- 『オスマン帝国衰亡史』アラン・バーマ 中央公論社 一九九八
- 『民族と国家』 山内 昌之 岩波新書 一九九三
- 『トルコ史』 ロベール・マントラン 白水社 一九八二
- 『イスラームと世界』 山内 昌之 ちくま新書 一九九六
- 『イスラーム復興はなるか』 鈴木 薫 (編) 講談社現代新書 一九九三
- 『トルコ民族主義』 坂本勉 講談社現代新書 一九九六
- 『民族の世界史4 中央ユーラシアの世界』 山川出版社 一九九〇